



# 対馬歴史民俗資料館報

第 7 号  
昭和59年 3 月

編集・発行  
長崎県立対馬歴史民俗資料館  
対馬巖原町今屋敷  
郵便番号 817  
電話 (09205) - 2 - 3687  
印刷所  
長崎市栄町 6 - 23  
昭和堂印刷  
電話 (0958) 21 - 1234

## 対馬を描いた浮世絵

津江篤郎

本館に展示されている一枚の浮世絵がある。大きさ22cm×16cmの小さい横物で、おだやかな浅茅湾をみおろした多色刷りの錦絵である。上見坂辺から眺めた「島山」を中心とした漁村風景ではないかと思われる。

周囲には帆船と帆をおろした船が点々と描かれていて、うまくまとめられている。当時は大陸と日本を結ぶ交易船や漁船の帆が島の周囲を埋めつくしていたことを偲ぶことができ

る。困いをした説明には

日本地誌略図

広重画

浅茅の浦

対馬国

対馬国 浅茅の浦  
西北海上に並列せる兩大島にして、壱岐の勝本を距ること十二里、巖原は都会の地にして上の島にあり上下二島の間を浅茅の浦といへり鰐が浦は下の島にあり北端の地にして遙に朝鮮の釜山浦

に對し煙火相望むべし

とある。説明の中の「巖原」という文字から明治期の広重作であることが分る。城下の府中を巖原と改称したのは明治二年であった。

初代広重は多数の傑作を制作して、安政五年コレラに罹り享年六十一歳で没し、門人重宣が二代広重を継いだ。だが故あって離縁となり、同門の重政が三代を名のことになったというから、この絵は三代広重の作品であらうと思われる。

ところが、初代広重の作品に縦もので「六十余州名所図絵・対馬海岸夕晴」という作品がある。広重晩年期のもので、前記の広重三世のものと同じ風景の上に大きく左から右に虹がかかった構図である。空間が見事に生かされて大きさを感ぜさせる作品である。も一つ歌川系の貞信の作に「諸国百景・対馬海岸夕晴」という縦ものがあり、虹のない同じ構図である。

私の知る限りでは、浮世絵の中に作者の異なる対馬を描いた風景が三枚あることになる。しかも浅茅湾風景を描いている。細かにみれば、線の違い、周囲の帆船の数や家の数が違ったりしている。三代のものには櫓を漕ぐ舟が浮かんだりして印象的で

あり、画家として当然の制作ぶりといわざるを得ない。はじめに描いたであろう初代広重が対馬に来たという話も伝わっていないことから推察すると、対馬屋敷の武士達に習った対馬風景ではないかと思われる。それにしても、浅茅湾を対馬風景の象徴として教えた武士こそ天晴れと言わざるを得ない。そして後の画家達は注文主の版元の意見に従って、この風景を描けば対馬であるという觀念になつてしまった感がある。勿論現在でも似たようなことが繰り返されておき、責める訳ではないが、當時としては猶更甚方ないことであつたと思う。

文化八年(一八一)の第十二次朝鮮信使の応接は、江戸に上らず、対馬で行われた。その時の朝鮮信使行列版画を巖原大町の貿易商三木屋喜左衛門が原図を喜多川歌麿に注文し、文化八年辛未冬十一月に公刊されたとある。(江戸時代の朝鮮通信使・映像文化協会編・上田正昭)

初代歌麿は文化三年長逝しているの、二代歌麿の作品であろうか。私の見たもので文化未歳信使行列図絵巻の墨摺版画がある。途中で截れて全巻揃っていないのが残念であるが、正使・金履喬 副使・李勉求の役柄

氏名が肩書きされておき、まさに文化使節一行のものであつた。

浮世絵はまだまだ対馬のあちこちの旧家の小屋の中に所蔵されているのではないか。対馬屋敷務めの武士達の帰省時や、伊勢参りなどの旅行

## 府中城下町絵図について

永留 久 恵

宗家文庫の絵図類は未整理で、全部を披見したわけではないが、管見のかぎりでは、享和元年(一八〇一年)製の府中図が唯一である。これは縦約三メートル、横約二メートル程の用紙七枚に描いた超大作で、全部を拵げて接合すると大広間いっぽうになりそうな代物である。二〇年程前虫干の際一度見たことがあるだけで、細部の記憶は確かでない。あまりにも大きすぎて拵げる場所がないに、折目が傷んでいて恐いので、見せてもらうことも遠慮しているわけである。いずれ資料館の方に移管になれば、傷損箇所を補修したうえで、研究の資に供したいものと考えている。

者の土産物として相当もちこまれていると思われる。何れ関心も高まり、整理されて、おもしろいものがお目にかかれるのではないかと、大きな夢をふくらましている次第である。

この外に、享保十七年(一七三二年)三月の、府中大火の跡を图示した町絵図がある。これは数年前町内の某氏より本館に寄贈されたものであるが、縦(南北)一七一センチ、横(東西)七六センチの大きさで、各家々の名前まで詳細に記入されている。そして焼けた部分は薄赤く、残った部分は黄色く塗って色別し、山や森は青く塗ってその輪郭を描いている。

大要を説明すると、火元は谷出橋を渡って左手(西側)の二軒目で、儀右衛の名があり、深紅の色で示している。付近(下宮谷)を類焼した火は馬場筋通を越えて日吉に移り、長寿院から奥の以酌庵まで焼き尽く

し、一方市ノ川に沿って笠瀨の両側を砥めて天道茂、田瀨、大手橋を全焼、后山の中腹に点在する民家まで焼いている。山麓の国分寺はもちろん丘の上の国昌寺も、昌元浦も全部焼失して、ほとんど一屋も残していない。

それでいて、宮前の遊月橋から下の今屋敷は、川を境にして全然被災がなく、中村町も焼けたのは川筋だけで、西側の半分は延焼をまぬがれている。この状況から察しても、風がおよそ北西から北々西で烈しく吹いたに相違ない。

町屋廿四町の約半分を焼失した損害は甚大で、幕府より米一萬石の救援を受けたことはよく知られているが、この図はおそらく、幕府へ提出した災害報告の付図(写)ではないかと思うかがであろう。武家屋敷や民家の名前まで記入された得難い資料であるが、町全体が描かれていないのはしかたがない。

また明治二十二年製の巖原町地図がある。時は維新後二〇年を経てはいるが、変化の少ない対馬ではまだ藩政時代のたたずまいをよく留めていたようで、町の形態は往時とほとんど変っていない。本図はもと巖原警察署にあつたもので、製図者は巡

查・森住吉、同古藤翼、屨板倉勝久と記名がある。

周囲の山や森の部分は描画だが、町内の道路や屋敷の区画など、町並は正確な実測図であることから、この三名の製図者が測量術を心得た人であったことは疑いない。縦（東西軸）約二・三九メートル、横（南北軸）約二・七一メートルの大ききで細い路地まで正確に描かれている。ただ惜しむらくは、町の北西部が全部容りきれず、棧原屋形（明治二年に厳原城となる）が載っていない。またカビが生じて鮮明を欠くことは保存上の汚点としてくやまれる。

現在、本館の一室に展示しているが、城下町時代の原状を知る資料として貴重である。ことに港湾の埋立により、東の浜も、西の浜も、古い海岸線を失った現在、往時の府中港を正確に知る唯一の資料ではないかと思う。また金石城大手の矢倉門が見えるのもなつかしい。この門は大正八年に解体された。

と改称した町名由縁の地であることの特筆したい。

もう一点、中世末期の府中を描いた古図（写）がある。町内某氏の秘蔵する彩色画で、今屋敷や大手橋の大半はまだ海中にあり、宮前まで入江になっていて、この入江の辺（西側）に池の屋形がある。

当時の府中は、中村を中心として北部を上里（宮谷・棧原方面）、東を向里（天道茂・田淵方面）、西南を奥里（国分）と称する四集落に分かれていた。そして大永六年（一五二六）島主（宗盛賢）の新屋形が池の地に當まれ、これより開けた新開地を今屋敷と称したものである。大手橋の辺が開かれたのは近世初期のことで、今は谷間となっている昌元浦まで入江であった。

霊石「与良石」は海中にあり、まさに水中の磐座（神を齋く所）と見られるが、これが現在横町に鎮まる石祠である。また「立石」は海岸の渚に立っている。今の山屋旅館から交通ホテルの辺が、当時の海際だったのである。今でも金石川が氾濫すると、この辺があふれるのは地面が低いからである。

もう一つの霊石「金石」も描かれているが、その後この金石は不明で

ある。おそらく金石城の築城によって、移動したか、失念したのであろう。本図にはまだ金石城は描かれて

いない。原図の製作を中世末と見たのはそのためである。

## 開館五周年記念行事の

## 「対馬宗家資料展」をかえり見て

白井 傳

昭和五十三年十二月二日開館してから本年で、早くも五周年を迎えることになった。それで記念行事とし

て、対馬宗家資料展、講演会などを開催することになった。

資料展の開催にあたっては、対馬町村会を始め、各町の教育委員会、特に地元の厳原町教育委員会は、多大な御協力を戴き深く感謝申し上げます。諸般の準備も整って、館庭の銀杏古樹も漸く深い黄に染み始め仲秋を迎えた。

対馬宗家資料展の開幕式は九月十一日午後一時からであった。当日は続いていた秋の好天もあいにくの雨になり、烈しい風を伴ってひと時吹き荒れ、長崎からの飛行機は対馬上空から、止む無く引返す程の状況であった。その様な悪天候であったが、遠路御多難な中をお出向き下さった宗武志先生を始め、島内各町村長さ



んや関係の方々多数の御出席を得て、滞りなく開幕式が行われ風雨の中であったが、宗家資料展参観の人達が続々と来観された。午後二時より前庭を距てたビクターセンターを会場として、対馬旧藩主宗家第三十六代に当られる宗武志先生の「対馬の文化について」という講演が行われた。青春学徒の日を、この故山で学ばれた宗先生の遙かな少年の日の、ふるさとの山川にお寄せ下さるなつかしい慕情と、西陲の対馬が持つ幾世代を経て今日に在る、得難い文化の香を、淳々とお話し下さる姿に、数百人の聴衆は深い感慨の中に聴聞した。



説明を受ける宗御夫妻

又、この記念行事の一つとして、一月二十日に、国立東京博物館の林屋晴三先生の「高麗茶碗について」と題する特別講演会も開かれ、本館に展示中の高麗青磁と共に、当代高名の先生の精密な講演は、聴衆の胸底を深い感銘の中に纏綿した。

本特別展は「鎌倉時代に対馬の島主となり、以来明治維新に至るまで外国（朝鮮）と特殊の通交関係を持っていた宗家（対州藩）には、他に類を見ない貴重な資料がよく遺っているが、本展は宗家文庫ならびに係諸家の資料より歴史的、文化的に意義のあるものを陳列し、この展覧を通して対馬の歴史の特殊性および文化の一端を考えてみようとするものである」と、「対馬宗家資料展」の開催趣旨は述べている。この趣旨に則って百十六点の各種品目を展示したが、前記にもある様に、これらの展示品は今まで未公開であった宗家文庫の貴重な多くの資料や、島内諸家に伝承されてきた貴重な諸品を出陳いただき、洵に有難いことであった。展示品を概記すると、一、古文書類として「宗家系図、花押印、御判物類、日記類、記録類、書翰類」二、地図絵図類として「対馬地図、城・館・形絵図、郷村絵図」三、

歴代遺品として「助国公義智公肖像画、義真公、藩主の揮ごう類」四、衣服類として「陣羽織、火事装束、上下羽織、袴、着物」五、道具類として「膳、椀、重箱、弁当、煙管、鏡、その他」六、甲冑、馬具類として「軍扇、刀袋具、馬飾、その他、七、徳川氏関係として「神君画像、奉書」八、朝鮮関係として「通信使

絵巻、倭館絵図、釜山窠御本、新羅仏、高麗仏、高麗青磁、高麗版経巻」等である。期間は九月十一日より十二月十一日迄の三カ月間であった。この期間中に来館された人数は、島内二七一一人、島外二四六七人合計五一七八人の多きに達し、この人数は常設展の一年間の来館者数に近い数で、特別展に寄せられた島内外の参観者の深い関心に感謝をささげた。島外からの参観者の人達の所感の中には、陳列の旧藩公の使用されたと思われる漆器類の、菊や桐の紋様、漆塗りの深く鮮やかに澄んだ色艶の香を交々に賛えられ、幾年月を経た今に、この様に大切に保管されて来た辺隅の島の暖い篤心を感銘され、又隣邦や大陸との遠く永い人心の往きかいかにもたらされた古仏の姿に、民族を超えた深いえにしと慈心を、今のうつつに尊く拝一ている

敬虔な姿や言葉有難く聴いた。又、ある日曜日に来た小学女児童は、床にひざまづいて菩薩像の御名をノ一トしていた。

ふたもとの公孫樹が、やがて黄に染み、あしたゆうべ夕陽に映えつつ地に敷き、古城趾の館に木枯が訪れる頃、ふたたびいつの日と懐しまれつつ宗家資料展は終わった。やがて又十周年、二十周年と歳月の流れの中に、記念展が催される日もあるであろうが、こよなきふるさとの祖宗の心を、後の世に大切に語り継ぎ保ちつつけてゆきたい。

## 主な常設展示品の

### ご案内

- 高麗仏
  - 釜山窠・対州窠
  - 朝鮮国信使絵巻（後半の部）
  - 倭館絵図
  - 御奉書数巻
  - 雨森芳洲書
  - 十六善神図
  - 上対馬町塔の首遺跡出土品外
  - ツシマヤマネコ・ツシマテン・ツシマジカ・オジロワシ
  - 民俗資料 約二十点
- 尚、展示品は随時変更することがあります。